

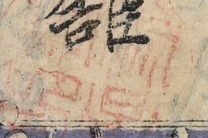
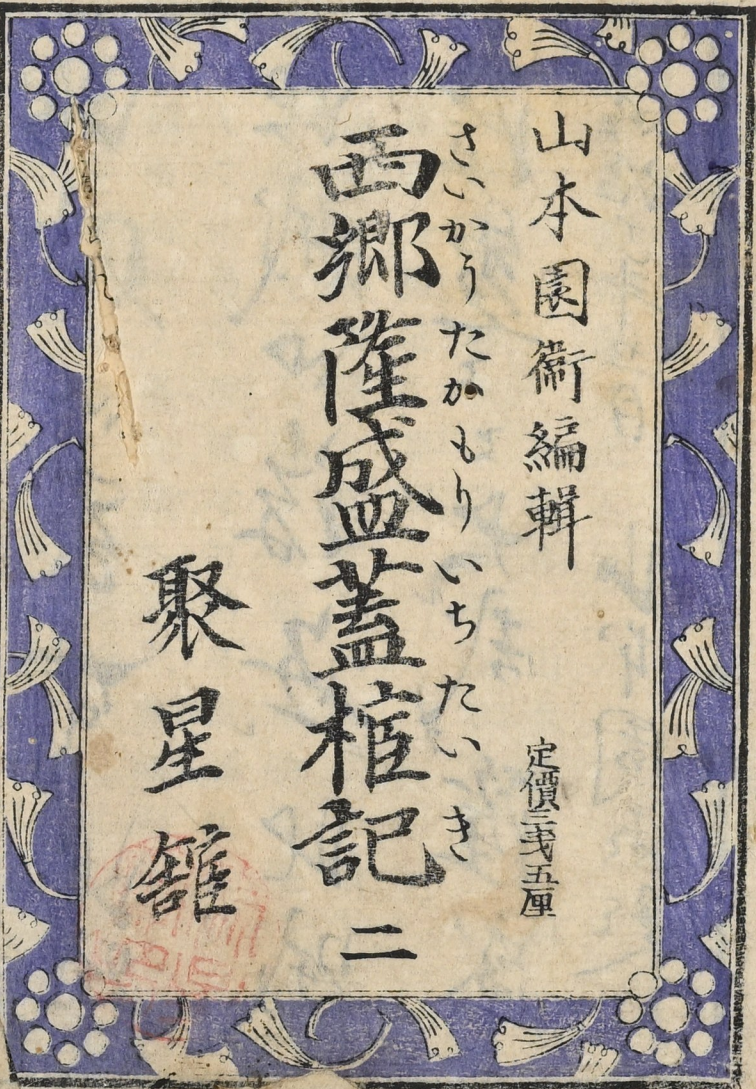
小

山本園衛編輯

定價五厘

西郷隆盛蓋棺記 二

聚星齋



此城ハ其ノ名ニ此城
 此城ハ其ノ名ニ此城
 隆盛ノ事ニ大哉隆盛
 此治十年正月 山本園東題

西郷隆盛蓋棺記卷之二

在東京 山本園衛編輯

西郷隆盛蘇生して幕城を收め
 軍巧を顯せし事蹟

却説西郷は不思議の蘇生を得るより名を菊池
 源吾と改めしかも藩吏猶世上の物議を憚り西
 郷をして大島に配流せり因て西郷氏よりは又大
 島三郎右衛門と名を換へられ纏ひ故有りて此
 島に竄せられ今回三次の流竄に因り大島三郎
 の名を付けられ恠る島根に世を潜ひ朝夕の用

途も乏しく星霜を經る久しきに至れるも志し
少も撓^なを彌堅く只學業のみ心を勞し居ら
れしよ文久三年に至り天朝と幕府の御間柄頗
る議論を醸し三條實美卿を初め七卿の御方々
西國へ下り給ひ長州の官市をましまし條公折
から同州湯田温泉へ行かれし序從士の原道太
と大島を遣はされ西郷を長州に招き取らんと
謀りしも原道太は大島を達せし事を得せ空し
く歸りしとる恁^たて藩主^{薩藩}より西郷を赦免し
且擢^つんし藩政を^{參與}せしめらる慶應元年幕府

征長の兵を還し事漸く平定に及ひしとき三條
公筑前を居られしを幕府とれを深く思まれ又
條公を大阪に幽^こし且各藩勤王の良士を探出し
相俱に幽囚せんとして幕吏^{勤索}をつくとせし雖
も西郷は力に依りて免る者少なからせ初め
京師の變に薩人の長州軍を撃ちし時獲り置し
良士等と呼出し西郷氏申されけるは方今の形
勢は各君志を合せ皇國を護るの大義有らんの
み兵を郷内に動かさし短長^短較せざるは尤も策の
得るものならせとて俘囚^{俘囚}の者を厚く禮して長

州は還し幕の再び長州を征せんとする時西郷氏又密に使を長州に遣はし和議を結ひ遂に薩長の交り日々親密に及ひしも幕府いまたこれを知らば三年十二月朝廷の大会議有りし時西郷氏か獻策を歸せし緯の多く戊辰の春西郷氏より参謀として官旗を輝かし江東に下るや遂に軍使を幕城に立て朝敵の罰を討さんとするに徳川將軍慶喜先非を悔ひ自ら書を認め其臣下を戒め潛に城を出て寛永寺に屏居恭順せし幕士等猶籍を脱し隊を結ひ既に割據の勢

を成し如何なる變事の出来ぬへくやと市中の老少家物を擔ひ東西に離散する有形なるに既よ海軍の官兵品用は數艘の軍艦入り來りしかは幕の老臣勝安房守隨兵をも具せを潛に城門を出て官軍の参謀西郷隆盛の本陣に來り徳川慶喜先非を悔ひ牙城を出て寛永寺に屏居謹演せし情狀を具し陳謝し萬一官旗を城下に動かし奉りなは慶喜一身の謬慮よりして上は王師の斧鉞し下萬民の苦怨を受け慶喜ハ一身容るゝ寸地もなかるへしと家臣一同愁歎の

餘り吾れ使合受げ軍門に哀訴し王師を弭め
ん事城懇願立られ勝安芳ハ素り西郷氏と知
己の友なれと今は正非の敵味方西郷氏は嚴
格に申さるゝ様慶喜全く以て謝罪恭順の實體
候ハ速に實効相立然る上寛典の聖斷候待
つへしと代言なれば安芳答へけるは主人慶喜
城を出立を以て顯然謝罪に實効相立候半哉
と申々もは西郷猶申さるゝハ主人慶喜先非
を謝し出城及へる上は今日唯今其臣下ゝ
其許始め直に開城致し官旗を牙城に迎へ奉る

へし左無くは君臣同體の謝罪と言ひ難しと威
稜高く言れし安房御鏡一々御尤は待れと
も今夜は最早夜深も成りぬれば明日開城官
旗を迎へ奉るへしと言も終らぬ其内は西郷氏
猶聲高く居城を明渡し君臣同體罪を軍門に謝
せり榮辱の機に臨み何そ明日を期ん即時開
城いよせしと手話の談鋒避るゝ暇無く安房
異議に及せ歸ふやいなや西郷氏には諸隊に
令し軍儀を整へ官旗堂々として直に幕城に
入りしかは幕兵衆より評議區々にして

歸城を等も居りしに安房歸るやいな命を弭め
軍數多入來り餘り事此急なる幕兵倉と知
度を失ひ誰獨り拒み争ふ色も無く蜘蛛子散
を如くにて前後も辨せを開城せしこと目覺しか
りし事ともなり一鋒を交わかゝる全勝を決せ
しは是皆西郷氏か英斷神速比良圖も出てし
のなり斯て又西郷氏は大總督も從ひ北越も赴
き蟻集れ賊を打平げ敵も蝦夷も走り所々も
屯集せしかば官軍海を隔て、相對し久しく成
功に至らざるも依て朝議有りて特も西郷氏を

召し出され撃賊の儀を命せられし西郷氏速
し御受け申上出て人よ語りけるは吾れ此行は
三十日を期し成功を奏せんと果して其言の
如く東北既み鎮平み及び歡感斜ならを西郷氏
を并して參議も任せしむ西郷氏之を辭して受
け給を遂に薩も歸る明治二年六月二日朝議し
て西郷氏に御沙汰書を賜りし其辭に曰く
勤王ノ志シ不淺。丁卯以來。六政復古之盛業ヲ
ケ。續テ參謀ノ命ヲ奉シ。東京城ヲ收メ。其後
ニ出張。軍務勵精。指揮綏急。其圖ニ中リ。竟

ヲ奏シ。奉安宸襟候段。叡感不斜。仍爲其黨を叩め
下賜候事

此御沙汰書を下賜り遂に西郷氏を召起して嚴
三位に叙し参議に任ざられ六年五月陸軍大將
に任ざられ参議を兼て居られしは十月廟堂征
韓の大會議有りし時西郷氏は專ら征韓の事
を主張せられしか其説合すして遂に職を辭し
國に歸り山野に徜徉して諷詠を娛し朝廷屢
召せども病を稱へて應ぜず客來るもまた逢は
ず折ふし門外に出て行かざるも其行所を知ら

をといふ或人西郷氏に問ひける君最早世と思
む出る事の無よやと西郷氏答へけるは行止
の機は今日言む知ふべき非を三四年を待つ
へしと答へしものと西郷氏先み賞典祿を辭せし
かと朝廷許し給を因て其祿を資として郷邑に
謀り私學校を設け西郷氏も時々校に入り
諸生を勵まし又書生數名を魯西亞へ遊學せし
めらる西郷氏近作一絶を得て爰に登記して
客の其西郷氏の胸襟を想像せしき証とを
幽居夢覺起茶煙靈境温泉洗世縁

地古山深靜於夜不聞人聲只看天
斯く諷詠を娛し居ける心の底を知る者を知
頃しも明治七年一月に佐賀縣下にて故參
の江藤新平なる者巨魁と成り暴舉に及ひる
を忽ち官軍に追撃せし所となり賊魁江藤新平
には去年比冬迄西郷氏と共に左揆右揆の重位
に居り殊更征韓の議會に論事同轍の友なれ
ハ今斯く世を潛落身と成るとを鹿兒島に至
り身を西郷氏の許に寄せ猶も征韓の事と托し
再舉を共に謀らんと佐賀より亡げて西郷氏の

許に潛來り吾心事の奥を打語らひ應援有れと
懇々依談み及ひしも西郷氏に更に謀る意
色無く江藤に答ふるに俱に廟堂の上より立
ち天下の爲えし事を議し且征韓の議事に至り
てハ尤も同意を待れども君今何等の事故
あるもよもよと度綿旗の敵を討つ時ハ王朝の
賊に對し則吾も爲えよ賊敵を如何ぞ君か
煽動に應じへきとて去年まで知己の友なれ
思ひも掛けぬ返答みて江藤ハ腹案相違し
しく立ち別れ程無く天戮を受けし後萩

暴動有^レ西郷氏の應援を望と雖も聲掃^を弭^め
ちよ無く日々學校生徒と俱^よ或ハ山野荒^と知
開拓^し自ら牛馬^を牽^ひて耕^つ世路^は風波^厳
避け居^りし形情^ハ所謂^孔明臥龍^{あり}と世^は人
景慕^{せる}事淺^{から}び
○編輯者曰西郷氏征韓^の議會^よて如何^{なる}主
意の説^{なる}や知ら^せとい^へとも歸國^後は篠原
よ答^へし書翰^を見て其大略^を想像^せへきなり
今其原文^を儘^と記^しび
朝鮮^ノ儀^ハ數百年^{交際}ノ國^ニテ御一新^{以來}其

間^ニ葛藤^を生^シ己^ニ五六年^{談判}ニ及^ヒ今日^其
結局^ニ立^至候所^全ク交際^無之國^ト同様^ノ戰端^ヲ
ヲ開^候儀殊^ニ遺憾^{千萬}ニ御座^候假^令此戰端^ヲ
開^クニセヨ最初^{測量}ノ儀^ヲ相斷^{彼方}承諾^ノ上
發砲^ニ及^ヒ候ハ、我國^ニ敵スル者^ト見^爲シ可
申^候得^共彼ヨリ發砲^ニ及^ヒ候共^一應談判^致シ
何等^ノ趣意^ニテ如此^時機^ニ到^候カ可^相糺^事ニ
御座^候一向^彼ヨリ蔑^視發砲^致シ候故^應砲^ニ
候^ト申^ス者^ニテ是迄^ノ交誼^上實^ニ天理^ニ
可^耻ノ所^爲ニ御座^候此場^ニ臨^ミ開^キ口

譯ニテ若ヤ難スヘキ所出來致シ候得シを弭め
 救ノ道ヲ各國ニ於テ生シ可申其機ニ至リと知
 ハ天下ノ惡ム所ニ御座候此戰端ヲ開キ候儀嚴
 大ニ疑惑ヲ生シ可申候是迄ノ談判明了ニ致シ
 候處此度條理ヲ失シ結局ノ場合ニ押來彼底意
 ナ判然致シ候得ハ此上ハ大臣ノ内ヨリ派出致
 シ道理ヲ盡シ戰ヲ決シ候ハ、理ニ戰フ者ニテ
 弱ヲ凌クノ誘モ無之且隣國ヨリモ應スヘキ道
 相絶エ可申候乍併手段ヲ經候テハ全ク跡戻リ
 ノ形現然相顯レ要路ノ人々ハ天下ニモ罪ヲ謝

スヘキ事ニ成立勢如何共不可爲ヲ恐レ姦計ヲ
 以テ是迄ノ行掛リヲ水ノ泡ニ歸シ更ニ戰端ヲ
 振替候者カ又ハ大臣ヲ派出致シ候儀ヲ恐レ如
 此次第ニ及ヒ候様何共道ヲ盡サス只弱キヲ侮
 リ強キヲ恐レ候心底ヨリ起リ候者ト被察候樺
 太一條ヨリ魯國ノ歡心ヲ得テ樺太紛義ヲ拒ム
 爲ニ事ヲ起シ候モ不相分或ハ政府己ニ瓦解ノ
 勢ニテ如何共盡シ爲スヘキ術計盡キ果テ早
 此戰端ヲ開キ内々憤怒ヲ漏シ候者ニテ可
 策ノ上ヨリ起ル者ト相考申候此末東京

如何共可見處ニ御座候二三度ノ報告ヲを研め
相分可申ト存候此旨愚考成行迄申上候節と知
日當山温水場ニテ西郷嚴
此書翰ハ真偽を詳かにせむ且脱誤も有らん只
聞け流儘を記せむなり
鹿兒島縣下暴亂ノ舉有りてより後に西郷氏
ノ戰略事蹟乃事ハ第三號より筆と立てぬ

編輯者 山本 園衛

出版人

吉岡

第一區十四小區
小網町四丁目九番地
第十一區一小區
寺島村百十四番地

五月十四日御届